奉寄
註解改正月令博義
八月部
三

九月部目録

△印ある俳諧の季と持りのこ

○養生の法○風風の考○米の豊凶
○妙薬○季とする祭其外人家
重宝のこと処々ゑ数多ある
ゆ目録よくんとするぞ

九月 卦 月支 調子 初丁
陰陽生 異名並註

△寒露節 九 二丁
△霜降中 九 三丁

日令
此部ゑハ九月日の定つくるしるべ支の定りくるしるべ

○裕 九 三丁
△御香宮祭 九 四丁

四日
京都聖華神社 九 四丁

△鞍馬祭 九 四丁

五日
△木幡祭 九 五丁
△醍醐祭 九 五丁

六日
△桂宮相模 九 五丁
△不堪田羹 九 五丁

七日
△重陽節 九 五丁
△醍醐霄祭 九 五丁

△菊節 九 六丁
△菊天
△栗節句
△栗いそふ

△重陽宴 九 六丁
△菊の酒
△菊瓶
△菊花宴
△菊蕊命

九日 △菊の着綿 七丁
九日 △菊花宴 八丁
九日 △佩萸 八丁
九日 △後雛 九丁
九日 △貴船祭 九丁
九日 △京醍醐祭 九丁
九日 △鹿谷天王祭 九丁
九日 △一宮祭 十丁
九日 △生玉祭 九丁
九日 △九日小袖 十丁
九日 △全日菊 △後菊 △節会菊 △武蔵菊 十丁
十日 △小重陽 十丁
十日 △近江田宮祭 十丁
十日 △五條天神祭 十丁
十日 △下鳥羽祭 十丁
十一日 △例幣 十丁
十一日 △御難餅 十丁
十二日 △太秦牛祭 十二丁
十二日 △後名月 十二丁
十三日 △住吉相撲會 △宝の市 十三丁
十三日 △天王寺二乗會 十三丁
十四日 △白川祭 十三丁
十四日 △京都岩倉祭 十三丁
十五日 △天王寺三昧會 △佛会寺 十五丁
△後の月 △豆名月 △栗名月 △二夜月 △名残月 △十三夜
十五日 △栗田口祭 十四丁
十五日 △神田祭 十四丁
十六日 △岡崎祭 十四丁
十六日 △小倉祭 十四丁
十六日 △桂川御板 十五丁
十七日 △度會新嘗會 十四丁
十七日 △摂津穴綾祭 十五丁
十七日 △野の宮別 十五丁
十八日 △城南神祭 十六丁
十八日 △摂津呉服祭 十六丁
十八日 △旅夷祭 十七丁
十九日 △婆利女祭 十六丁
十九日 △上難波祭 十七丁
十九日 △八幡花頭 十七丁
十九日 △座広祭 十八丁
十九日 △淀祭 十七丁
十九日 △天満流鏑馬 十八丁
十九日 △逆神祭 十八丁
十九日 △津村祭 十八丁
十九日 △北山祭 十八丁
十九日 △住吉神送 十九丁
十九日 △鳴滝祭 △福を神祭 十八丁
十九日 △周防山口祭 十九丁

九月令

此部おハ日の定らざる九月一ケ月のうちにあつらへるす

△伊勢御遷宮 十九丁
△番船 △絵香 △早綿 十九丁

△落水 九ノ廿一ノ
△海鬣廻 九ノ廿一ノ
△新綿 九ノ廿一ノ

時令

此部ハ九月の時節ハ
つゝろゝ霜ゝそのゝ迄出ス

△春の秋 △秋漢 △冬なる △冬ちゝ 九ノ廿一ノ
△冬ど隣 ○も外詞多〻
△九月尽 九ノ廿二ノ
△野山錦 △山粧 九ノ廿二ノ
△秋霜 九ノ廿二ノ
△露霜 九ノ廿二ノ
△露時雨 九ノ廿二ノ
○露寒 九ノ廿二ノ

草木

此部ハ九月の草
木の類をあつゝしるす

△菊 △白菊 責菊等菊
品類かづくあり 九ノ廿二ノ
△菊合 九ノ廿七ノ
△菊花香 九ノ廿七ノ
△地楡花 九ノ廿八ノ
○川芎花 九ノ廿八ノ
○黄芩花 九ノ廿八ノ
○岩菊花 九ノ廿八ノ
△蘆穂絮 九ノ廿八ノ
△薄散 九ノ廿九ノ
△椿の実 九ノ廿九ノ
○掃の実 九ノ廿九ノ
△密柑 九ノ九ノ
△柑子 九ノ九ノ
△九年母 九ノ卅ノ
△金柑 九ノ卅ノ
△温州橘 九ノ卅ノ
△佛手柑 九ノ卅ノ
△榲桲 九ノ卅ノ
△南天燭子 九ノ卅ノ
△罌子桐実 九ノ卅ノ
△皂角子 九ノ卅ノ
△木蘂子 九ノ卅ノ
△菩提樹 九ノ卅ノ
△川楝子 九ノ卅ノ
△桐油実 九ノ卅ノ
△椋実 九ノ卅ノ
△槇擅実 九ノ卅ノ
△栩実 九ノ卅ノ
△老母草実 九ノ卅ノ
△栗子 九ノ卅ノ
△毬栗 九ノ卅ノ
△落栗 九ノ卅ノ
△栃栗 九ノ卅ノ
△茅栗 九ノ卅ノ
△栗子餻 九ノ卅ノ
△錐栗 九ノ卅ノ
△三度栗 九ノ卅ノ
△榛子 九ノ卅ノ
△櫟子 九ノ卅ノ

△椎　九ノ三十
△椎の葉　△椎の小枝
△椎ていまつ
△新胡桃　九ノ三十
△新松子　九ノ四十
△茱萸　九ノ四十
△榎実　九ノ四十
△無果花　九ノ五十
△仙蓼　九ノ五十
△漆子　九ノ五十
△色付く松　九ノ八十
△千土生　九ノ九十
△緑豆引　九ノ九十
△牡丹　九ノ十
○小菊化　九ノ十
△椎紫　九ノ三十
△團栗　九ノ三十
△新榧子　九ノ四十
△水木子　九ノ四十
△熟柿　九ノ五十
△鴨上戸　九ノ五十
△晩稲　九ノ五十
△紅葉　一種ちがうくわう　九ノ五十
△破芭蕉　九ノ九十
△うこ粘　九ノ九十
△蕎麦刈　九ノ十
△佛甲草　九ノ十
△菊花弱花　九ノ十
△蟹の實　九ノ十
△梅嫌　九ノ十
○木うへ付ニ用意　九ノ十

生類

此部ハ九月一ヶ月もうくの生るいとあらえーるを

△尾越鴨　九ノ十
△熊栗棚かく　九ノ十
△霜踏鹿　九ノ十
△紅葉鮒　九ノ十
△射祭獣　九ノ十
△鳧水為蛤　九ノ十
△細代打　九ノ十

必用

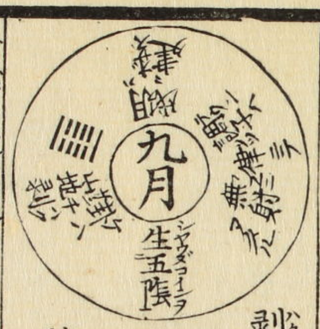
此部ハ風雨の占の破軍のひ方○日ごうのよーゐ悠行の心得○作者のよーゐの式○生産の式○料理ちん立の法食物のよーゐ等其外品々あるべし尤日定ゑるこゝハ口の日令の部ハ日のさゞまゝさる二月一ヶ月要用の事とゆゑ書ゑるを部ハ日のさゞまゝさる二月一ヶ月要

△紅葉衣　九ノ十

九月目録終

九月之部

△印付るハ世俗俳諧季寄出て用来る景物へ



剝ハ群陰陽を剝尽す月なり仍て草木花葉ともに枝幹凋て剝落ずるなり

無射ハ陰気外陽氣降て萬物陽気ハ隨ひて出て貪る虫魚の類蟄伏し草木根ハ帰り潜むなり射とハ仍て無射と云

異名

△季秋 礼記○暮秋 曾書氷珍

△梢秋 四時纂要 晩秋 韵府

△無射 礼記 △寒露 韵府 △玄月 事物異名

△素秋 韵府 菊秋 事物異名

和名

△紅月 △紅樹月 △菊月

△菊開月 △寝覚月 △紅葉月

△木深月 △小田刈月 △梢の秋

△長月 これハ能ハ八月ともいふも九月可なり八月の日まなす

異名註

△季秋の季は末く秋のもとと云ふなり　○暮秋とは秋の暮なり年の暮とおなじてタの暮にていふ　末秋を末の秋ともいふ　△梢秋は梢は末なり　諸木紅葉して梢は末なり

△晩秋は晩秋といふと季吟いはれり　△晩秋は暮秋と同じ

晩の秋といふ事なり　△無射は上ボつり　△寒露は節の名なり

△玄月は玄はクロシと訓黒きは純陰の色なりよりて玄月と云

△素秋といふは素は白し秋乃金気の色なり白なれども外金の本色なり

なり　○菊秋とは當月は菊花乃咲出る月ゆへなり　菊開月といふも同じ

藏玉　寝覚月　家隆

いく秋かわかれぬ枕の長さあり月ぞ入ぬ夢ぞ覚ぬる

秘藏　彩月

[illegible]

莫傳　菊開月

[illegible]

雲玉集　梢の秋　木末の秋ともいふ　実隆

[illegible]

莫傳　紅葉月

[illegible]

新古今　長月　花山院

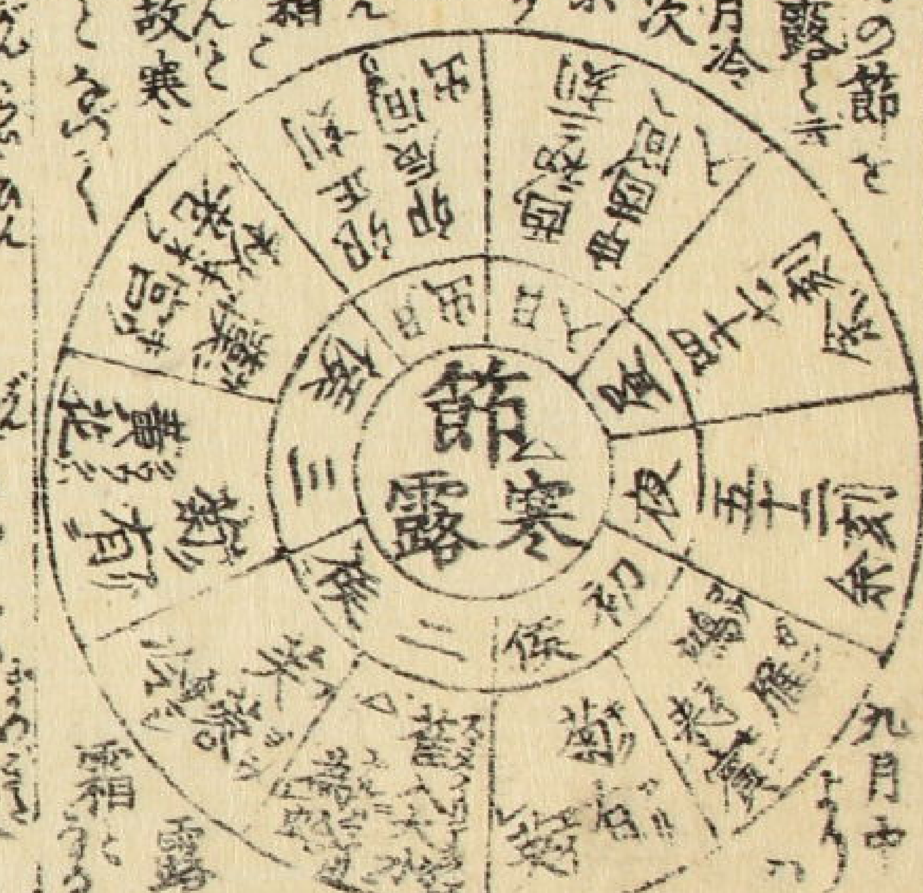
秋の秋いとやよ月ふりにけりあくるもいかや残るせるかも

藏玉　小田刈月

[illegible]

寒露　九月節の名なり七十二候の帥木七十二候の昼夜長短之説

九月の節を寒露と云ハ此月冷寒次第ふほのう露凝んて霜とゑらんとする故寒露となづく



鴻雁来賓とハ雁ハ仲秋先来るものハ主となり季秋におくれて来るものの賓となすなり○菊有黄華とハ花既にひらかんとして英づると云△雀海に入て蛤となるとハすべて飛ものハ化して潜物となるハ天の理なり故ふ潜物ハ又動物となるなりたとへハ田鼠

穴居せし潜物ハことごとく水蠆蜻蛉と成毛虫蝶と変ず皆

天道の盈てるをかくんて謙ふ益をもて不足ハ補ひ盈つるを

缺を故ふ飛ぶ物ハ潜む所謂如斯し○芙蓉冷しきハ荷葉枯破して倒れて樸物凄く冷じ○菊有黄花とハ既に盛んに開くとなり黄ハ菊の本色なればなり○漢宮ハ漢の代の宮女の物ねたみひとしてひそまり居るふたしくて秋ふるくなるにまさがひて婦女などのそのおもひ頃になることをいふなり

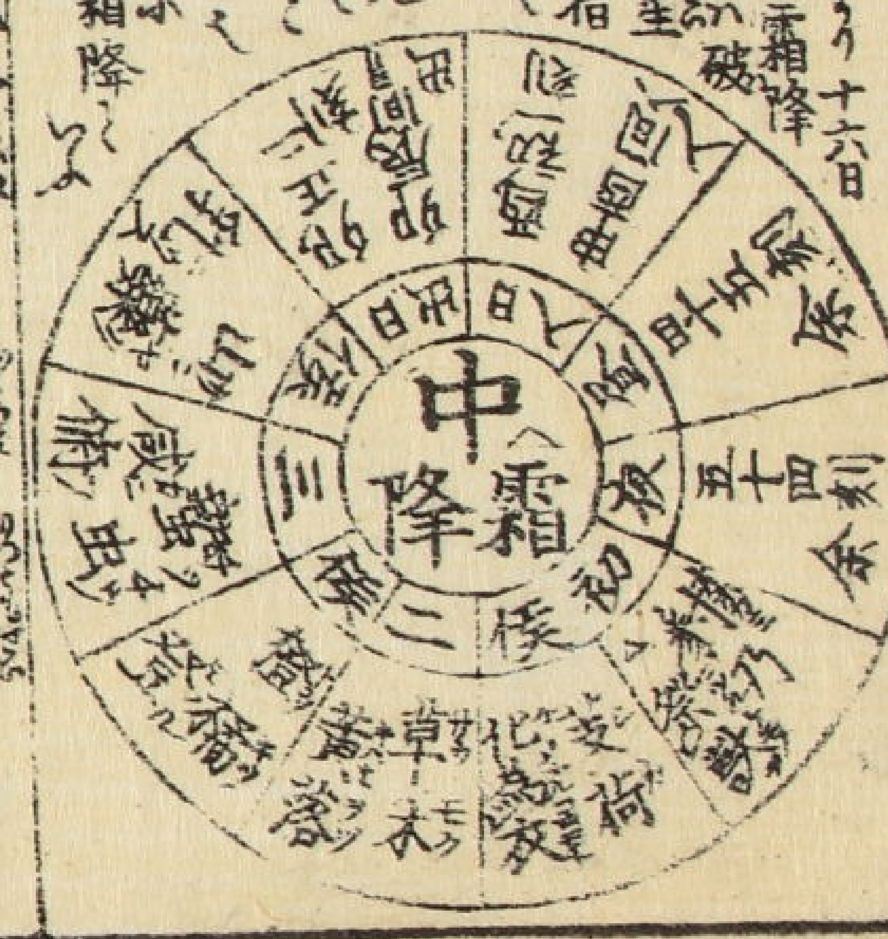
節天氣占候

此月巳午の方より雲出きハ必風ふくべし北西の風ハ久しく吹ことなし風の後に雨ふることも此月のくせなり○十一日十九日十七日必風雨のある日也雷なれハ米貴し

虹をいれハ麻の價貴し五穀もたかし月蝕あれハ年あれて凶年なり

△霜降 九月中節入○七十二候○草木七十二候○日数入○昼夜の長短左に記す

節より十六日目を霜降と云 破軍星戌に指
霧結んで霜となる ゆへに霜降といふ



△豺は山犬とも云狼に似たる性あるけだもの獣なり鹿兎の類を殺して天を祭ることなり○菊は菱の浮薬なり荷は蓮の葉なる枯て羅の如くなる故衣と化すといふなり○草木黄落とは諸木の葉の黄ばみて枯るる紅葉し千草黄ばみて枯れ落るを云なり○橙はだいだいなり橘みかん此類みな登るなり○蟄虫咸俯とはとかげ虫の類は蛇蜥蜴のよるず咸地にこもりて俯をなす○山薬とは自然諸蕷なり

乳をとれば実の入る事乳のまはりたるやうなればなり

日令

九月の日は定まることを女の定まるごとし此部の

朔日 不成就日 ○今日南風吹けば麦價登る ○風霜を飛ばせば人民疾病多し

袷 今日より八日まで着す 九日より綿入なり 夏は四月朔日より五月四日まで袷を着る 諸礼家の式なり 三ツ図会にも出 單物は近来の物なり

狂 ひつとえの単は若丸まつくばあわせてそへくれる秋の宮内

朔日 伏見御香宮 今日出 祭は九日 山城国伏見にあり 古名御諸神社といふ 神功皇后を祭まつり 今日御旅所へ神輿御出ありて九日まで御出中 とかく旅所は大亀谷の東にありて古御香と称ふ 是文禄年中太閤秀吉公御遷座ありし処なり 祭の当日九日也

朔日 京都 鞍馬祭 今日出 神輿渡 御今日ノ祭ハ九月

御旅所ヘ御出九日ニ還御 大 藝

明神ト云○大己貴尊ト云ヘリ

朔日 大坂 ○天王寺 金堂 舎利講 ○刻音樂 安 ○宮嶋 今日市ノ有リ 藝

南都 ○氷室祭○南都四十四社神ノ祭ハ春日 伶人舞樂ノ大和志

○春日若宮御縄練の式今日ハ假社ニ宮若宮御旅所ニ常ハ

二日 ○今日晴ルレハ來年春雨ナ

ラン ○今日房事ヲ慎ムベシ

南都 ○東大寺鎮守八幡祭此祭

久シク退轉ヤ京都天明

火災の後故有て再興ヤ

ラン 其ノ復ヲ嚴重ニ

三日 ○北斗ノ御燈ヲ奉ラル

年中行司 貞世

京都 ○大通寺六孫王御出○多賀神觀音堂水仕○山城国ヨリ

四日 京都 ○北野芋茎神輿の北野天神祭ハ八月ナレトモ今ハ絶ス

今日氏地ヨリ芋茎御輿ヲ茎菓子ヲ以テ神輿ヲ造リ渡御ノ次ヒヲ各

五日 山城醍醐祭 御出今日ヨリ

○萱尾明神祭○鯨醍醐ノ祭

ミ日野ヨリ

木幡祭 抑大明神ト号ク天怒

骨奥ヘ宇治郡木幡の里有

六日 京都 ○高臺院殿忌○大閤秀吉公の政所ヘ高臺寺ヲ建テ散法ヨリ

七日 不堪田奏 昔ハ諸国の田の稙亡ヨリ所々の目録

をして奉ラレ付ケ租税ヲ免

ーヨリ作ラフ田ヲ

心ヘ不堪田ト云ヘリ 公事振濃ニ出ル

(三) 年中行司 秋いる町のそ夜殺

とゝいてはくこふそくの坪付もうつ

能 西州の名門の立や不法田 荷号

京○久世祭○久世の神社い久世郡寺田村の氏神と寺 西の岡久世村祭

都

万葉 やほろの久世の社の麦ゆうそれ苗の付立さゝやらむ今ぞ折てゝ

遠江○中郷祭又飛神祭とも云○熊神春日郡ふ太王命と合せて五社明神

上卯 占候 北風東風吹けい来年三月七月米價貴

八日 桂宮相撲 六条北西洞院西ふあり じゝそ 拾水抄 こ出

京○泉涌寺舎利會○湛海といへ

都僧嘉禎末ふ宋より持かへり舎利をいつゝ此日音楽あり泉涌寺い台密禅律の四宗あり

○玉水祭○山城国井手の郷玉水乃里なり

江○勾當内侍祭○堅田の浦ふ塚あり

州夜祭ゝ内侍い新田義貞の妻ゝ

醍醐霜月祭 今夜社前ゝ註三番あり霜宮註と云

九日 不成就日 重陽節 △重九 △菊天節

△茱萸節 △栗の節句へ栗いこゝ昔い天子敵殿ふ出御ありて今日鄭會行ひて韻と撰つて文こゝ作り文章ふ居て講ぜらるゝ事根源に出

今日と重陽ゝこゝのいへ老陽の数あり九九い陽重るゆへ重陽といふなり ○重九といへ九九重る故聲ふ應じて名づく ○一説ふ重九ゝこゝい是い俗ふ長久ゝいへゝ同音なれい祝ふなるべし

菊花宴 △重陽の宴 △菊酒 △菊瓶 △茱萸袋

今日群臣ふ菊酒とる茱萸の袋と身ふ佩び又い茱萸の実の付る枝ゝ折て頭ふさゝめい悪気ゝ去るゝ云風土記ふ出 次ふ故実有

重陽の事 并 菊花酒造る法 故
支詩等 委し 日本歳時記

出典見る事 ○二巳端午 七夕 重陽 昔

祝人々右四節に陽の月陽の
日なり是陽と尊び陰と忌む

意なり 又上巳の粉餅 端五の粽
長陽の菊酒 又栗等 其節の物
故是と食ひ又人に送りて
其日の佳節と祝ふなり 草木子出

(宴) 年中行事 内大臣

ぬばたまの夜の明けぬれば
久かたの天の川原に出でたちぬ

玉葉 新院典侍

紅葉を色の秋にかへて九重に
咲きそめにけり菊の花

風雅 慈鎮

久かたの月の八重さく菊とれば
かさねし袖もあり金ふく

(詞) 久の長きに。菊花さうよ。

月の久しきを。久しきに。久しきに。久しきに。

(連) 行の系ふれば汲そへん菊のみ 宗祇

(俳) かりけのくるさせや菊の乳其角

義むし ふそむ果を久の菊考
かり久け庵の咲やくふ乃ふく 全

(狂) いあ八のあ久ふ舞の菊の酒
久九重のいそひふ れし 吾 正定

菊の着綿

枕草子ふ九月九日
の菊を綾とすし
の綿ふつゝそ糸らせうとて
此日の式を調んとして前日より花
ふ綿とさせて風霜を除く為
り此日菊の開ぶるもあれ
綿を菊の大さにしていろく色
はをそおろるもあれ
今も猶大内よい菊乃ゝ
ゝ宮女ゝ手ぞさひと
たまふなり

(俳) 長綿や髪ふ結ひ大笑 道古

(宴)かけ置一盞の綿をそのうへにもおりそいさくを奏まるれわり　相摸

九日　茱萸　佩萸

此日茱萸ヲ佩ビ菊花酒ヲ呑ムヿハ費長房ガ桓景ニ災ヲサクルヿヲ教タル故事ヲ由来トス此事甚論アリ委シク日本歳時記ニ年明ス

○唐土ニハ今モ今日山ニノボリテ菊花酒ヲ呑ミ婦人茱萸ノ代ヲ挿ムヿヲ事文類聚ニ出ス

菊花宴　周ノ穆王ノ愛童ヲ慈童ト云シガ罪ヲ蒙ムリテ酈縣山ニ謫サレタリ此山谷ニ菊花充満セリ慈童常ニコノ菊ノ滴リヲ呑シガ終ニハ百餘歳ノ寿ヲ保チ魏ノ文帝ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝ニ此術ヲ授ケ奉リシカバ文帝コレヲ受テ百年ノ寿ヲタモチ玉ヘリ斯ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニ

ヒタシテ用ユレバ寿ヲ一ストヽ云傳ヘタリ委シクハ日本歳時記ニ出タリ

(詩)重陽五字對句　同上

棒筐萸香遍　臨風孟嘉帽
稱觴菊花濃　乗興李舊舟

(詩)仝七字對句　詩礎

今日暫同方菊飲　献酬杯
明朝應作斷蓬飛　客中愁

崔国輔

(詩)重陽之詞

秋葉風吹黄帆々　アキノホノハニカゼガフケバキバダ色デ
サラく晴雲日照白鱗々　タル中ニ白
雲カアルシヲヨガテラセバシロイイロガキラくトミル　歸來得問茱萸女　山カラカヘツテ來タ茱萸ヲオビタ女ニトフタレハ
今日登高醉幾人　今日ヤヘノボツタヒトヲイクタリホド酒ニヨハレタリ

(状)九月節句之尺牘

重九鄭重々々黄花馥郁偶有
送壺酒客敬待公之曳藜於
叢間催風月興趣連々玉韻詞々

重九 佳節○九日○登高日 山へのぼる日

○萸節○九々良日○黄花佳期 九月九日のメデタキ日ノメデ キクノセツク

鄭重 至祝つ嘉幸○致歓〻 メデタク メデタクシ

○申悦 ノブヨロコビ

送壺酒 オクルコシヨウ スコレサケヲオクル

贈孤樽○以 オクルコソンヲ モツテ

酒甕 シユヨウヲ イツソン

曳藜 エイレイ オイデ

寄駕於蝸庐 ヨセヨカヲ セツタクヘオイデ

○来叩蓬户 キタツテタヽケホウコヨ セツタクヘオイデ

風月興趣 フウゲツノケウシユ オモシロキアソビ

尋芳 タツネハヒラ イツタヘモ

玩景○寄趣烟霞 モテアソブケイヲ オンイデ 寄趣 ヨセシユ シユヨウ エン カニ 烟霞 円上

連々玉韻 レンくキヨクイン ユルくオサククレ

自作口頭吟○五七言之芳韻 ミツカラツクルコウトウノキンヲ クチヅサニくヒラツクル ヒヅ ヒヅ ヒヅ

(丙)西そくまるしそ宮ホわゝい向く
釜ヶ山の法隆の　みや　慈鎮

九日　△貴船祭　祭神二座高龍。奥御前。當社ハ龍
徳の垂跡ふして雨を祈て雨を止
むる事を祈る御神なり

(丙)新古今　わたの江の田のうほ雲ぢ
うけて外せぬふるの江上の神　加茂宣平

九日　△鹿谷天王祭　○淨土寺村十禪師
祭昔ハ九四日なれ共今ハ九日
なり京銀閣寺門前ハ十禪寺社あり
○中村祭。長谷の内なり夜ハ入
行なゝ故俗ゝ盗人まつりとゝ

九日　大坂生玉祭　祭神活玉神ゝ今日流鏑馬等あり

九日　河内一宮祭　平岡神社と云祭
外和州春日同神ゝ
○科長神社。祭ハ六月八月九月
九日ゝ山田村東條なり延喜式出
肥。長嵜諏訪明神祭。傘鉾
前踊等あり甚ゝ賑ハ十日ハ鹿解
ゝて九日供ゝる鹿ゝて各拜
殿ゝて鹿ゝ着ゝて酒ゝ呑ゝ
播。明石大倉谷稲爪神社祭
磨祭日ハ二人牛ハ乘ゝて社頭ゝ
乘る例式なり　ゆゝよ牛乘祭

九日　天氣　九日ハ晴ゝ至る雨降ゝ
少ゝ晴ゝ晴ゝれハ冬至並
來年元日両日晴天ゝて冬中ハ雨
も少ゝ若雨降ハ月中降ゝ若
降ゝハ豊年の兆なり。終日東北
の風ゝて豊年ゝ西の風ゝ凶年

九日　△九日小袖　御湯殿記日九月節
句なり二ツ襟と云ト今
日なり　縹色小袖ゝ着を小神ゝ
ゝハ線入ゝの　ゝゝ

十月　△十日菊　△後日菊　△後の菊
△残日菊　△残菊。残芳

菊ハ九日の佳節ニ用ゆる物なれ
ハ九日ニ用ゆる物ハ禁中
ハ十日ニ用ゆる也

殘菊宴あり

(詩) 千載　基俊

九きくにいさるくれなゐ
ぞさひしく寒のくれ

(連) かりとあてかりてふかくの明方月林

(能) ひさぎ　十日の酒　けさ五あり　其角

(狂) 九日の馬かたちかゝらふろひ　冠里

(詩) 十日菊　壬字對句

閑遊陶公與　詩礎

蜂猶探十日殘之三月三日

餐英楚客詞　蝶尚狂日暮春

十日

小重陽　唐土ハ京俗今日會

しそ小重陽ハ本

朝ハ九日の後宴ハ

○今日より九日とくへ

十日

江四宮祭　近

神體彦火火出見尊

大津四宮ハ引

山十四番ハ物くやー造花等出る

近郷ハ京祇園祭の山鉾ま

わるくるまは大津第一の大まつり

(一) 大津　高山寺　若宮祭

十日

京都五條天神祭　祭る所・少彦名命

アとそ京師乃俗このやー後

と天使の社ハいふ

下鳥羽祭　山城国宇治郡下鳥羽ハあり　午頭天王

と祭る田中天王と名づく

(能) ひるねの夢や　蛍水　蛍水

十日

若○遠敷大明神祭。祭神上の宮ハ

狭火火出見尊下の宮ハ豊玉姫

十一日

例幣　天子より伊勢大神宮ハ御幣と奉る

例年のごとくなれハ

徳天皇ハ下ぬそ此使と制ぜる

例幣使ともいふ

(能) い勢屠風　ものうけの例幣　文屋軒

(狂)冠の礼とたしてのさくこと
めさまう初位まうくう　百二

十一日 京 ○六孫王権現祭。八條北大通
都 寺ふあり六孫王経基公と祭る

十二日 御難餅 ○日蓮上人七字の題目とゝなへ一流
の宗門と立て安国論と著いして
諸宗とそしる故ふ平の時頼怒て
伊豆ふ流と三年すて免され鎌倉
ふ帰て尚諸宗と誹るふようて弟
子ととふ土の牢ふ入て文永八年九
月十二日鎌倉龍の口しつ会ふて
首と刎んとす時頼の子ときと憐
て死罪とゆるめ佐渡の国ふ流と
其後大赦ありて帰る上人遷化の
後弟子の僧竜の口ふ寺と建る
これと龍口寺といふ今日黍詰
多く像の前ふ供と供ふ今日
難ふあひなまうの日ゆへ今日そる
つる餅を御難餅といふあり

十二日 京 ○太秦廣隆寺
都 太秦牛祭 ○桂宮院
内ふ伽藍神あり大酒神と云聖
徳太子川勝ふあふやて建る処く
摩多羅神と祭る日あり上宮
王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛
ふ乗て高声ふ祭文とよむ此祭文
甚奇へ変くいと追て補遺ふ
(俳)ひん抱ハよくひれ流して牛糸ふ素堂
牛糸ふやの写く皮つゝこ 桃隣

十二日 大 ○多武峯祭 ○田身嶺
和 本殿の中央ハ大織冠鎌足公く

十三日 今日晴ふれハ晴久しつゝこて残ふ
綿ところ良 ○雨降ハ冬雨雪降

後名月 ○後の月 ○豆名月 ○栗
名月 ○二夜月 ○名残月

○十三夜。此夜の月と賞する事
寛平法皇より始まり保延元
年九月十三夜ふハ雲いさ〳〵く
月明かく明月無双のよ仰

出されしより今日と明月と
いふ中右記ニ出　鳥羽天皇保安二
年ニ関白忠道公九月十三夜の月
を賞し給ふ詩あり歳時記ニ出
○五雑組曰上巳有風梨有蟲中
秋無月蜂無胎九月十三夜晴るハ
釘靴掛断縄といふり其外説多
日本歳時記ニ委しく載せり
○民俗今夜豆と柿とを食ふ栗
とも食を撰択委しく歳時記拾遺ニ
いろ〳〵書ニ出さり面白きことなり

(歌)続後拾遺　二夜月

ちとせといふこゝろは秋の末にてこゝろ
こゝろにもいろ〳〵にうつるかたちかな　頓阿

草庵集

あきの夜のけさ咲ぬるくさの花うつ
月も光おのふくさもいろ〳〵　

(連)五十韻

(俳)本朝文粋ニ載る所の二夜ハ宗碩
俳諧ひとり本の間ニ出たり後の月
豆を合て豆の花も縁ありや　鬼貫

招くゝ月ハ出ぬ後の月　去来
義理ハいるそてあるうのち迄月　乙由

(狂)名月ふるう仰ぎ月の新つきハ
二つもろしのとゝ〳〵草月　金波

(詩)九月十三夜詞　林春信

季秋逢遇十三天　末ノ秋ノ中デコヨヒ十三夜ノ空ニ
月ヲミルトキニアフタゾ　明月無雲自粲然ノ明
月ニ雲ノサハリモナクテ今夜似星残菊
オノガカラ光リガアキラカナ
色コヨヒ星ノヤウニミエ光ハ蟾光相映一欄
残キクノイロヲミレハ
前月ノ光リニハヘアフテランカンノ
ヘニキラクトスル

十三日　大坂住吉相撲會

△宝の市。
△外の市

今日神輿堺の宿院へ渡御
ある相撲十三番ある故ニ
會〳〵今日社頭ニ外てう鉢と
離ふ是と宝の市といふ市笑姿
の神あり諸国市の始めなん

(俳)外男ふて分別ありの月えゝ芭蕉

(狂)年老て杖にすがりこれてそ人の宮ゐり〻〻　貞柳

十三日　京都白川祭　祭神天滿宮白川村南の方有智の生土神なり

十四日　大坂天王寺一乘會　昔は今日修行なれども今は絶えり中世より十五日大念佛會と行なるゝ

十五日　大坂天王寺念佛會　今日未ノ刻六時堂そ修行と太子の鳶鞏と六時堂ふるゝ奉ると舞樂あり當寺にて湿祭會聖昊會今日の念佛會これを三大會といひて嚴重の法會なり俗ふ祇祭〻〻

○三津八幡祭　○玉造稲荷祭

十五日　京都岩倉祭　北山の岩倉山なり祭神十二座なり北岩倉大雲寺の鎮守にん昔は王城の西隅ふ岩倉ありて社と

なて帝都の守護なり是は其一なり祭礼夜ふ入神供と奉る

十五日　京都粟田口祭　○午頭天王と祭る鉾十七本あり

昼は粟田御殿ふ入り夜は白川橋と越て知恩院さゝひの細き板橋と渡るゝ山上まて鉾の曲特なり甚面白きこと〻ぞ

十五日　江戸神田祭　天平二年ふ大己貴命と鎮座往古は神田と云国々ふ大神宮へ初穂を納むる御田あり大己貴命は五穀の神なれは右神田より此神と祭るゝ其後延文の頃より將門の靈を本殿のかたわらに祭りて今二座と奇祭りは隔年ゝ子寅辰午申戌ゝ山王祭と此祭と江戸の大祭なり

(俳)こもけたる野沼の作田作系　李々

十五日　豊前小倉祭　祭神三座ゝ應神天皇神功皇后玉

俵姫ゐる十四日神輿ゝり殿ゟ渡御
やぐらあり夜分祓あり十五日祭ゝ

十六日 △山城岡崎祭 東天王の社ゝ云 西天王の社ハ吉田山の麓ゝ有鉾七本あり神輿ゟ先達てゆく是と鉾とまろとゝ其内一本の鉾釵ばの上ゟ土ゝそつくり大鷹とゆく名づけて大鷹の鉾とゝつて神宝ゝす 雍州府志出一書ゟ祭ハ九月十五日ゝしゝ

○伏見三洲祭。天武天皇と祭ゐゝ入午頭天王ゝも十二日ハ御出ゝ

○岩屋明神祭。神体宮道祖神ゝ山科大宅村の東ゟあり

十六日 △度會新嘗會 ○神嘗祭ゐり今日伊勢外宮ゝ天子ゐり新米の初穂ゝ供ゝゐゟ度會ゝハ伊勢外宮鎮座の處の名ゐり内裏新嘗會ゝ同ゝ俗ゟ御祭

ゝ称ゝ明十七日内宮ゟあり事実外宮ゝ同ゝ事ゐり

(俳)芭ゝゝ名ハかしゝや影嘗ゝ奇風邪菜湯ひろふゝゝの文かゝす東巴

十六日 △江戸芝神明祭 十一日より廿一日迄ゝ祭礼の間甚賑ハゝ

寛仁二年九月十六日此處ゟ鎮座ゐゝゐゟ生姜の市ゐり参詣の人菜生姜ゝ求めゐり家毎ゟ糠漬の中ゝ入漬ゝ仙ゝ喰ハゝ年中邪気感冒ゝ秘ひ伝のゐるゝゝ俗ゟ生姜祭ゝゝゝ

十六日 △堺神明祭 ○木辻天王祭 ○大井大明神祭 丹波祭

△桂川御祓 桂川ハ大堰川の末流ゝ松の尾ゐり南ゝ桂川ゝゝゝ伊勢の齊宮ゐり立ゐゝ皇女明十七日群行ゐゝゆゝ前桂川ゝゝゝ

十七日　不成就日　京○諏訪祭。六条烏丸と都室町との間をいヿふあり

野々宮別

○伊勢大神宮へ齊宮ふるゝせゐゝ内親王三年の間野の宮ふこゝりゐ物いゝしゐして勢州へ旅立ゐゝ其ゝゝ天子ゝゝつゝ齊宮の頭ふゝせゐゝゝれと別ゝゝの櫛といへ野の宮のゝゝれとゝゝへこゝゝゝせゐゝへ野の宮とゐれていゐゝへ行ゐゝとゝゝゝゝ野の宮い小倉山の辰巳ゐる籔の内ふ古跡と残ゝゝゝれとも古へ處と卜定ありてこゝりゐゝゝゝゝ

うゑ結をうさる地あるゝ池田をれその里ともいふ

十八日　大坂　○今宮祭　やぶさめいふ祭神五座あり

○天王寺廻廊立花。十七十八両日人

○高津宮祭。夏祭六月十八日あり

十九日　京都　○南禅寺亀山院御忌妙傳寺七面明神開帳

今日齊戒沐浴して心を浄くそれい吉事を得るあり

十九日　山城城南神祭　祭る処七社一下の鳥羽中嶋壇上。塔森。石倉。竹田。小枝の土人産沙神とすむ〻鳥羽上皇乃離宮ありて是を城南の離宮やしろ城のこゝろふあり

ゆへなるべし〻今い鳥羽帝をあらはすなるべしといふ

十九日　波利女祭　高辻室町西ゝあり俗ふ繁昌の社といふて子孫のさうくを祈るあり此社い婆利ゝ女ありそれをいひ誤りてハンビヨといふ又それを云あやまりて繁昌しとなるべし

十九日　京都旅夷祭　建仁寺門前ゝあり栄西国師勧請もる処うして旅行の海上ゝ祈むく人い先ゝ此社ふ参つて風波の難をうけん事をいのるゆふ旅乞びをといふ一説十六日ともい

へりなほくさ〻くい諸国祭礼記ふいでゝ面白さ〻〻多〻

十九日　山城八幡花頭　社僧弟子髪を剃て衆ゝ加る時草花を製し酒宴催すゝ花の臺い六月の日と多〻みてたり

おくり

能　花の咲時分ゝ〻〻〻天窓ふ来山

十一日　今日杞柳の湯そゆあそ〻れ無病長命うるといふ

廿一日　京○天道社祭。五条坊門猪熊有
都○栢社祭。灰方の南林の内に有

廿一日　大坂上難波祭　俗ふ稲荷祭と
いへり博労町あり

本社ハ仁徳天皇と祭る稲荷ハ
地神にして本社のかたわらふ鎮す六
月の御祓神輿御旅へ渡御甚賑ハ
今日ハ秋祭にて神馬の渡りあり

廿一日　江○根津権現祭。隔年ふあり
戸　祭神委しく博物筌ふ出ぜり

廿一日　山城淀祭　小橋の乾ふあり淀
姫神といへり傍ふ千
観法師の宮あり又一座伊勢
御門神祠といへり又一座伊勢
島小橋の東河中ふあり納所楊枝
社寺淀姫の説まちまちあり又小
橋の北ふ大荒木社にあり同日
神事ふ寸又水垂ふ淀姫明神と云
あり廿三日ふ神事あり
ゑること然るべし

廿二日　大坂座摩祭　摂州西成郡の
物　惣社といへり今
日の祭と相撲八十島祭とこれ
傳へ六月廿二日御祓の時神輿御旅渡御
廿四日　河内○植松村逆様祭。廿四日と
祭礼として廿五日と宵宮にす
廿四日　近江逆神祭　大津相坂関清
水大明神鮮九の
宮と称す此処古歌ふ詠ずる関の
清水の旧跡なるよしへ傳へて
此宮のある処と今ハ清水町と称
また此宮の別当と近松寺と号し
て諸国説経者の本地とむりハ
浄るり説経と以て世とする者
此寺の免状とうけたるよしへ説経
者日暮小太夫う請ける正徳二年乃
免状とまのりうり見うまつの
日ハ説経者来りて神輿へ供奉ると例す
廿四日　山城木幡祭　今ハ五月へ引メ延

廿五日 不成就日 坂△大天満流鏑馬の式あり

廿六日 京都△北山祭 洛北衣笠山巳寅の林中にあり六所明神と云又北山天神祭と云へ拜殿にて三番叟あり祭廿七日と云

廿七日 大坂△津村祭 ○津村御夷祭。鎌倉權五郎景政の夷を祭る故に五郎の社ともいふ中世より中央天照太神左八幡宮右に鎌倉權五郎都合三座あり

廿八日 京都△鳴滝祭 △福王子社鳴滝社と合祭るといふ福王子は初め歩荒神と云しが福王子と轉化せしと云説あり神体は光孝天皇の皇后班子を祀ひまつりしと云ふ京俗これを五器あるひまつりしと云ふ

○東山大谷報恩講 廿七日廿八日

○醍井荒神祭 ○沖小路火の尊祭

廿八日 大坂 廿八日○天王寺舎利講 音楽あり ○晦日石の鳥居神送り

廿九日 小雨あれ廿九日より○今日風雨あり ○今日能々身を慎へ

○今日は夢窓国師忌 天龍寺 相国寺等持院等にて執行あり

卅日 △住吉神送 摂州住吉にて今日玉出嶋御祓の神事行はるゝ神祇あり神送と云事社記に見えず十月と神無月とにあり神々出雲にあつまりまつりあふ故に俗説にかくて今日の神事と俗に神送りといふなるべし神無月のことなり委しくは十月の部並に日本歳時記にくはしくしるすへし

中己午 周防△山口祭 吉敷郡山口にあり祭神住吉三社

月令

九月一ヶ月中ハ頭ヘ載る雑事景物を出ス

伊勢御遷宮

内外両宮ノ御ハ振社

ハ二十一年を歴ねば必ず造営あるべし九月を以つゝ御遷宮の月とさだまる

番船

△綿番△取綿。追綿。浪花ノ新綿と一時ハ菱垣船ハ積込し出船の吉日と定め纜と解く前後の番と取て定る同日ハ出帆と江戸着岸の前後を争ひ少しにても早く着岸すると手柄ゝ出帆の見送餞別ハ船ハ浪花ノ綿船迎世ハ十月ハ出帆ハ種々祝ひと送ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

晋ふい新綿の夏ハ此議を新綿
くろくて真綿のくろくて七月十六日
の処ふ委　俳ふい新綿と訓して謎
くて七月十六日の季ふ新綿く
詠いていふこゝろい木綿のこゝろ
俳　ちく孫や白菜ふ初霜ふ故栖

時令

此部ふい九月時節ふ
つくる夏霜杯の夏を出ス

暮秋　△秋の渓　△冬を待　△冬
ちくて　△冬を隣　いぶと

も九月中項ようり晦日までの夏を
つ尚次の詞のもつ△印ーあるハ
俳の季ふ用ゆるをり哥ハ秋
の名残ふーまるく心を多くよろ

哥　家集　秋の渓　正徴

ちくこゝても秋の渓乃川くゝに
ふるようもひーて行ふ水ふ

正治百首　△冬の秋　慈鎮

△冬この秋杯ふ用いかくゝ人きて
あしひふ逝ふ有明乃月

後拾遺　秋を惜　範永

おもとよりいくゝ付ふやゆ孫をつん
多の秋をわくむ徒り

夫木　前中納言定家

ちくむをふ初も稜の房も秋れて
嵐ふくゝ松むーの変

金葉　中原経則

おすよりは貫れ道の秋さうの
社もうけふのこれくんとすうん

同　暮秋虫　西行

秋ふくゝよろるハむーの変のこゝろ
こゝく我くても粧くやいある

詞　秋の八れくゝ。秋のかくゝ。秋の素純。
秋の別強。芳て移。ゆ。移り。移り。
△秋ふくゝ。△秋の沼△秋を惜。△ゆ
秋△秋ふ野くゆ、△秋暮て△秋の別
△秋の名残△秋を八て△さまゝ秋移
△移る秋△秋ふ後くゝ。尾花ハ移移と
ちゆく。霧ハ秋の移葉を八てこあよ。
虫ハ移移ゆくゝ人妻ふよろる。かれく

ふるる露は秋のむさぼかく。霜は冬もいそく
えやもおくる。時雨は冬をいそく

俳　秋はやたゆのそのゆ杜鵑
きくれば素秋うるるれい鶯の老崖雪

狂　商人惜秋　柳牙

あれ人も金引付のまん者くい
よろけふむしーの孫をやさくらん

詩　暮秋五字對句

望極関山遠　菊枝花半在
秋深烟霧多　霜樹葉全稀

詩　仝七字對句　詩礎

半山雲影前林雨　水痕収
十里風香晚稲花　山骨瘦

詩　季秋之詞　王維

蒲溪白石出　荊溪十全モ水カ
業稀紅蓼花枝ヲ　天寒紅
空翠濕人衣　山路元無雨

九月盡　九月晦日　哥

九月の末　九月の末
月晦日ふかぶかくれり

詞　雨中九月尽　公任

ふるるる秋のもりん秋やとる
今ようもたるるるやとりせよ

新古今　閏九月冬　大政大臣

みへて世のわーこんたて情むり
秋ようる後の秋のかとりを

詞　今年の秋。今年のこの秋。
ようの秋。暁のうひとかきり。よるもす
ゆるるゆ。今年の金引。かりのを
と秋もつるるとと世くろるを

連　家のふるるるるの赤藻の秋。宗祇
春月さんあるるる名称さ々よの秋宗養

能　天保三年明月八月十五夜の秋月の景人のちくさむ庵の邪　李由

狂　長月くつるも長し日数ふそそれて去まへいたれそうそつき　天寛

野山錦　△山桂○柳木色付　△山の紅葉きをいろ

又草花いろく咲ることいろ

哥　後撰　　読人不知

秋の野はすゝきのこもをゆふなれいろ〻の秋の花ぞ

能　秋の月　秋の月の光ゆ〻しきかの山乙由

秋霜　霜　冬　暮秋ふ潮置初　初霜　冬　式

能　秋の霜　秋の霜の光さえに跡すなき　道三

詩　秋霜五字對句

江楼暗寒雨　雞声菊店月

エノアタリノクサムラニアルヤウニ　ニワトリガヒクヤウニ月ニナク

山亭冷秋霜　人跡板橋霜

コノセンヤウザトハアキノミチガヒヤカニフル　人ノカヨフタメニアトガイタ

露霜　露　陸　陽　霜

露霜　露の陸陽の氣なる

そう陰気勝て霜雪となるなり

秋の末冷気つくるなれい露むを

んで霜となるなり

哥　碧玉　　後柏原院

秋と末野のむらく霜ふきうへて

秋と末野のうゝ草の草

萬葉　秋の野のさむさ夕の秋風ふ

ゆうちふ書　書なゝのきい

能　秋の野　秋の野の清士の火の家き武業

露時雨　露　袖　濡

露時雨　露が袖をぬらすこと　愛を

も時雨のやうに思ふゝゆ〻露時雨と

いへ和哥ふいたゝこと　おぼえ

つまくろもよみ

哥　風雅　　定家

ふるひやる花のみをこの落ちて

つゆも付ぬもとと落されこと

俳　清雲の美つまや松の秀附の蓮二
高き　まさごろ　奈花小宮や秀しま　北枝

△露寒　秋の末ふかくして露もむ
ゆへ此頃の露いさむ〳〵と霜と〳〵と
故法もさむしとよろ

草木

此部ハ九月一ヶ月諸
のくさ木の類を名ずす

△菊　史正忠が菊譜ハ曰菊惟介
烈高潔ハ百草と其盛
衰と同おうてとく云云　按とる小菊
花既ハ蕊こてより凋むハ至る迄
凡花と見る事四十日ばかり春苗と
生ず夏盛ハ秋花と開き冬実
を結ぶ根と多て植ハ花葉質と
変ずと実と植きハ千莖万朶一
幹ごとハ姿態色香咸変ず実ハ
仙家の翫弄不老延年の灵草へ

異名　日精本ハ出○紫菊○艾菊已上雅出
黄花明詩○秋菊楚辞○甘菊事文類聚ハ出
隱君子范至能菊譜序ハ出○落英離騒○佳友
事物異名○月深陸龜蒙ハ出○延壽客○
籬客○隱逸花韵府

和名　まさごり草△百夜草　星ごき
形見草　よろず草　藏玉　千代見草日上
ちぎり草　かりよりて　秋ちぐ草　秋
きる草　かりよりて△金草△れ
の花△とる花　ふる草　長月花
いそで草　草のるゝ△花の
△曽我菊△承和菊　たゝれくさ
かさりのこと　のこり草

註　△花の外△才草　ちぐいるハ梅
ハ諸木ハ先ちきくハ諸草ハ
れくゝゆへ名づく
△義和菊　義和帝黄菊を愛し
多り義和帝黄菊と愛した
まひしゆへ　承和帝と申奉る
ふ仁明天皇の御事なり
○按ふ承和色とハ黄色とハ
べし　西宮記ハ直衣の色ハ承和色と

月草本

散る紅葉はてこれは黄色淡せう

寄 寛平菊合　陸奥草

もみぢ葉の万代をふまさう草
あをひ一種紅葉しぬ一葉し

藏玉　星見草

庭のもみぢ葉ふるさとてへんもや星見草
まさうの葉いろ紅雜ぶそこなる

秘藏　かつらもまだ

さいひこの垂我宿のもみぢの門ふ
かつらもり紅葉はいろてかはるう

藻塩　たうす草

ちはやふる神のまもりの紅へのこす卅
これもこころさの数ふつまし

篠目　ちさる草

秋分をいの花いろくや数ふう
花の数分をいろふこへつ

莫傳　霜見草　此名は古今集にもあり　のちくさう　名分さう

霜めそふとをやおんこう数の
おきまくんせう寄葉の花

藻塩　いなて草

長月の九日ふさるいなてを
えるい八重ふて万代そへん

○秋無草

ふ卅りへこのあやまうるし　藻塩中に

紅ちりそそれ名分ふ秋るくさ
かくこふ卅ゆるさの寄る

藻塩　秋去くれ花　一説に秋去れ

あさちふまくる寄塚もかくまで
弾ふ弱てるるかさくれ花

○蘇我菊

かひこふをぬの中間とうう万葉
かのこゆる池へふきそるきくの
去々くさてこのもこのこうさ

寄 新勅撰　月前菊　右大臣

めもてはる秋の月新変ふう
まう紅の葉のるるの上寄

後拾遺　読宮庭菊　長房

数ふる紅八重さく重れ九ふ
こんゆうい数のれけんまうう

家集　菊開中友　行宗

染のうへも我ぬしいひも新なる
こきくゝそ老の友しるりの色

詞　ふかのきく。新の古く葉。まされの
きく。葉九月。しるし。ちとせの花。八重葉。
八重かさねれ花。赤みうつろふる。
葉の色ぐ。ぬる梅の菊。菊の新芽。
濱に吹上の陵。往古のこと。あらし
の陵。池にみるもの新庵ふるあり。
古江の花　下水に菊の下葉。花乃
下水。老とせく。ふ世なをしる。
そそくるひとのる。ふ年の新
うつる。露に雪のまれる白ふ。
雪のまれく花ある。白ひも老る。
祝にいく千年ときひとのる。ふ世。
繁秋。かくうるをとうひ。露に春
に菊ふ対文孫あり。ちくとより。
ちとわまる。わ秘めるく霜に色の
かるとと待り。うろふきくの
こもゝされも。ぬきはとゝ色ぬ。
○九月九日に久ふとさかりるふえい

節のふいつと菊ふとよくそ
九月九日のふく十日ようい秋菊
ようてそふといふ九日く。秋菊の
と哥ふい秋の末又冬のそめ
いもよあり。いろいろる又いおく表
などむをふ屋

連　菊さけいかいろ表紙宗祇
ゆゝ表ゆあふきくれかうに省柏

俳　病ふくわうる菊の蒼介芭蕉
菊白菊ふ赤の名ゆうる嵐雪
材ゆゝ小判の手や菊会支考
ふ跡の菊弾きくもちひろ越人
ふ表ふ表ふ菊のつゆに移竹
菊の表ふ表ふ花も清め　樗良

狂　菊の花ある色ふかうねと
けく世ていうへ見まり　貞徳
ようくと材ふをぶりて大ようい
幾ようせと弾し　義光　千山
ふそうていあるそ葉れ姫の色
内ふい花の枝とつをく　貞室

詩　菊五字對句

露凝千片玉　曲池潔寒流
ソノコリカタマリヲキタルガカヤウニエル　イケノメグリタルニサムキ水ガキレイニミエル

菊散一叢金　芳菊予金蓋此
キクハイロイロ色ナハヒカヲミルコトガヲヲイタヤウナ　カウバヒウニホフキクハナハニガヲノレベヲノベタヤウナ

詩　今七字對句

植處清香依玉砌　青玉潤
ウエルトコロ　セイキヨウヨリキヨクイロ　キクハウエタアタリハキヨキニホヒ　キクハ青イ玉ノヤウナ

摘来泛蓋滿金樽　碎金香
ツミキタルヘンスイニフタキンソンニ　サイキンカウバシ

詩　白菊詞　魏舒

濃露繁霜着似無　幾多光彩照庭除
イレモ、白キクニオイテハイロカナイ　コノキクハイカホトノ花ノ色ヤヒカリガアルテ　コノキクハ白イイロデヨルモ昏モジガミラレル

何須更着螢兼雪　便好叢邊夜讀書
ナンヲモヒニサラニツケルヒヲトラヘキ　コレテハ学問ヲスルノニ蛍ヤユキヲアツメルニ及ハヌ

菊合　殿上人の御遊もそいうへ々度々あり　和哥を詠とゝ平城天皇大同二年九月幸神泉苑四位已上共挾菊花昌泰三年詔侍臣菊花献千樣八月左右番闘色香而擇其尤者栽之殿庭

菊花香　こくを炷く香なり

妙術　仙茶の方　黄菊と茯苓と松脂とを九蒸〻服らるゝ長壽之術

菊酒の方　菊の莖葉もに黍米もうへ酒ふつくりの丸べ長命〻

菊品類　揑々菊　小揑々　大白　白大　白小　白中　楊貴妃　白をこゝあろ　金目　貫　黄色　銀目貫　白小　銅目貫　大般若　白八重　黄大般　黄大　大般若　白大　薄色千重大　酔楊妃

かさろハ日本　小紫　紅紫　鳳凰　黄いろ　中さん

かも紫　うすむらさき　小さん

ろくしょう　きちんかも云　両面　伏見

常盤　白ー　紫　小さん　花のくく　黄常

盤　千重黄　桐壺　中さん　千重　有明

白十重　しいろもう　櫻菊　白中さん　銀

総　白中さん　三川咲分　黄ーろ　咲　中さん

仙臺咲　ちがい咲　唐車　いろ

大さん　花形九ようろ　ろるぬふ似ようろ　天人　うすむらさき　大さん

二重　黄色　天下　天人ふ似ようろ　初心　乱

握々　一ちゃ　ふまのこころ　一重握々　うすむらさき　小さん

石山　ちさむらさき　中さん　大朱柿　大さん　くれいろ

郭公　うすむらさきーろ　小さん　三井寺　くれあい

黄咲　きけ　末摘　半ひくきこはてい　きむらさきそさか

ふるれびうすむらさき　ぶいるぐーもう

○此外△白菊△黄菊△万菊△大菊△小菊等数百品あり

○菊品とゝ云る本ふ人りーき

ゆへ爰ふ略と右菊品といる

本ハ花形大圖にして分毫も

たがはず　ふして堂上方の御

哥をゝりゝ且ハ菊の植ゆる花

の咲しゆうを委しく記す

地榆花

（俳）吾亦紅　黄木香○吾亦紅。

葉藤ふ似て花千日紅似

川芎花

（本名）芎藭（一名）蛇床草○蛇避草。花

実ハ芹のゆふ傘ふるるり

（俳）川芎ハ黄ふ流るゝや渓のみ其角

黄芩花

（名）赤金○枯腸。花

の長さ一寸許筒咲紫

色又白色もあり

（俳）ふ々のはく　芙蓉ふれ花そさけ　二由

△岩菊花　花黄ニ一外ニ多クあり
まり咲きて泡の如く
さ留ぞ用ひて上ぎこの類へ
なれば一名泡ざくくも云立花の人
乗い表青く背白ー
(俳)泡さくくれなきを見てふ画は　詩六

△蘆穂絮　二百余年前永禄年中まで木綿ハ日本へ
種と渡さず夫故真綿の外ニ綿
と云物は勿論木綿も布ニ穂
絮と入て下賤の者ハ布子ニ
着さりとて今も江戸にて
中入綿とホウレイ綿と云穂入綿の
転化せしへ蒲團も蒲の穂を
て造る故の名へ今も大坂にて木
綿と織て布と為と云ハ右の訳へ
(狂)それもいろいろあれ花もらし　光俊卿
(俳)ふかりて蒲團ふ海女の秘蔵　宗鑑
右発俳ハ故事と合そとり後詳

穂絮故事

孔門ノ閔子騫と云人母先ダテラレシ
カバ父後妻ヲムカヘラレシニ閔子騫
至テ孝行ナリシカド継母ハ二人の
我子ヲ愛シ継子ノ閔子騫ヲ深
クニクメル餘リ我子ニハ真綿ノ入表
服ヲ着セ兄ノ子騫ニハ芦ノ穂ノ入
タル表服ヲ着タリ父コレヲ聞て後
妻ヲ去ラントイハレケレバ子騫ヨ
レヲトゞメテイハク母在セバ一子寒
ク母去ルトキハ三子ヒニ寒シト云テ
母ヲ去ラル、ヨリ止ノ玉ハ父ヲ諫ル辻傳

△尾花散　花と云枯る薄くとくの穂
が獣の尾ふ似ると故尾花と云ハ
(狂)続千載秋ぬ来ぬとおもて七月や
木枯の尾ふるゝ枯ぬ　ゆり

△薄散　△枯尾花。枯尾
(俳)雀さの果ハ尾花の秋ふ成素堂

△椿實　木字海石榴和名抄ニ出
皮をひきに仁を取ぶて油

と取へ○千梅ノ説ハ畿内又ハ江東の方
説ふ椿と木の実と云といふ

橘子（異名）洞庭佳味 前月 黄金丸 霜未月上 未奴 事物 遺安 呉名 遺志

○橘の説多し先密柑
ものと定むべし　本草綱目 三十四 會小出

橘の子として季節用ふ時は橘又ハ
盧橘ともして哥連俳ともに夏ノ寺

密柑　紀州有田肥後八代を
密上とす

（俳）ハ如の犯やその色やまさぬ芭蕉
夏あけぼのとい今の密柑ハ宗鑑

柑子　橘の後ハ渡り物へ。鬘物語その石のうへ
かる水ハ小柑子ハ今の世にさ
うそうそられ世ハ○又謡曲の通小
町ハ文ハ大小柑子金柑とうく
ハ京摂の俗年始ハ庭ハ小
柑子ハ密柑ハ賣りハ大柑
子ハ密柑ハ皮麁く柑子ハ皮細密

乳橘　俗九年母と昏（俳）九年
母やとろく甚さ風の考巻

金柑　金橘と云（俳）金柑や
ゐる上り猪路静

○密柑ハ九年母。金柑の説
真淵の説ハ小柑子ハ金柑なん
大柑子ハ密柑なるべしとハ
契冲の説ハ小柑子密柑大
柑子九年母なるべしとハ
ゐるまこと是なるや

温州橘　其葉密柑ハ似て薄く
ハ其実形密柑ハ似
温州ハ漢土の地名ハ此然ハ産
る橘ハ諸州ハをゞまてあら
美なるゆへふ温州橘と
名ぜ者て名だかし

佛手柑　実の形人の手の如
指あり故ハ佛手
柑と云味よかゝず香気いと
昔日本ハ近世ハ

枳殼　人家垣ふ植る俳かゝ立ハやそ三月とさくハ玄春法印

福樗　一ルメロハ蠻名ニ其実初生ハ毛あり熟ハ毛ハ信州ふハ尤多し

俳猿会の歌迎ニ福樗ニ多色蕉

南天燭子　実ハ赤小豆の如く数十一かさまりてあり

蹲子桐實　天竺桂の実あさゞの木と云りのゝ

蟬ふ制ハ物くやぶ内桂とも云

俳たりの実やはいたゞき　おさ愉乙由

皂角子　和名皂莢　西海子。大木あり葉ハ槐ふ似

こう実ハ豆のごとくさやと垂り長さ尺余ふも及ぶ夏黄

白の花をひゝを

俳さいしの実ハ縫うれさあふ竹夏

木蘂子　葉ハ藤のごと俗ふ実とツブとゝふく是を念

珠ふ作る少ハ一名菩提樹とも云

あゝえび其実ハ椿ふ似ハ本草二出

俳むくろの芝と於て咎る衣ハ麻文

菩提樹　葉ハ椿ふ似ハ本草二出　又一名ハ無患子葉ハ冬

青ふ似てやゝ尖長ハ実ハ枇杷ふ

似ハ念珠ふ作る俗ふ鬼見愁と

名づく註邪気とゝくゝと云秘傳花鏡

今ハ京永観堂ふもありとぞ

川楝子　俗ふ此花を楝ハいハ

真の栴檀とハ大ふ異

ゝ実と金鈴子と云形状ふよ

ゝその名ハ茱萸ふ苦楝と云

俳ゝの名ハ茱萸ふ苦楝と云

桐油實　実九ハ大ハ油ふ多

ゝ或ハ漆ふかゝても

用ゆゝ法あり其功荏油ふ似ハ

本艸　蹲子桐虎子桐と云是ハ

椋實　木は榎の木に似て本一種変生うるべし実も又同し熟して黒く味甘し小鳥好んでこれを食ふ葉は物を磨き鞘に枕くす珠と截盤持盤と念珠ふも作るに用とする事甚多しいづれも大木となる

(俳)椋の実はとりもちの実や電白羽

槟榔實　高木あり花は木瓜に似たり実は槟榔に似てなる〻花は愛とべし

(俳)槟榔の実は花は木瓜に似たり

栩實　又柞とも百但種類あつて実と結ぶものは栩へ此実の名と椽とかきて和名つるはみ黒色と染る物へ椽半と つくこと栗より大なり葉の大なるは七八すべりにて栗の同種異物なり遠国山家これを麺とする棒もそうらふ延と手元の甚せつきりの故世の諺ホトチメン棒とそうし急なるこのたくへこいつり葉は八つ手に似たり

(元)山ふかき中ふせるく水そそんうつく落るとち拾ふ紀　西行

(俳)とち拾ふや一字と落す三大経其角

乾草實　実熟して赤し四時葉凋まず故に万年青の名あり唐に嘉祝ふ花鏡に見えたり

(俳)はむてやはて狩の人のもとの千代ふる物は八月やとちの実　史方

栗子　(異名)河東飯○天台道果津物異名○砂糖船来せざる先は栗子は果子は果菓の最上なり漢土にもこれを貴ぶと見えて唐の李商隠が雑纂に富貴の躰と云へり栗の皮と出せり千て日ふて搗粗皮と取ると搗栗と云盤にそ打る紙打栗と云

(玄)ことそろれて木むれふ山ほ[illegible]栗
ひろひのこせる秋やなぬらん　爲顕

(俳)笠ふいもろくと栗の秋の貧　由平
いら栗ぬかるるあ流るる嵐雪
ぬもりふこうるく栗の淋しさ　芭蕉

(詩)栗五字對句　同上

包刺如猬　朱夏滋栄日
雙肌欲合歡　清秋結実時

毬栗　栗いがのそとく又一重そのうるかいあり是をいがといふ

落栗　木ふるる時をそくかいそぐけてなのるを地ふ落るをいふ

栃栗　栃栗。指の頭ほどあり小さく黍ほどの栗なり木も小さく

漸く二三尺ばかりの栗　栃栗とはる事なり

蕎栗　蕎栗の下も板屋の苫すへ　望翠
月光雪や苫のろくにやとぶつき　其角

栗子餅　栗を粉とする餅ふまぶしる物へ

錐栗　形長し錐のおとく尖る　本艸時珍說へ

三度栗　山栗にて少し年ふ三度実のるを上野の山中ふ多し

榛子　榛栗。得眼。葉ふ皺多し故ふハシハミといふ

ろう花の後ふい実を繊ぶとる
し別ふ新枝の末ごとくかしれど
ぐ蕚ありて包む栗のおとく
生食もるふ甚美なり

櫟子　いちいの実へ悉皆櫟ふ似て分ちがひ　○先の別ふ毛
のを如きものいちいへカレふい毛
の如きものを椎のおとく炒りて
食ふ又凶年ふい粉ようして食ふ

(俳)ろうとう小屋ふ櫟の実ふ李完

椎　落椎へ椎ひらふ。椎ハ実
の名なり木の名ふあらず

故ふ椎となづけ実のこと
なる木の一名鐵譜といへり

(俳)見すぼらしき椎をさげ山ちる白州
笠のうへ二見椎の附ゐ郡　尚白

椎柴　△椎の葉△椎の小枝。
△(三秋)△庵ていの椎。椎柴と云い
椎の木の柴ふるくなる事　椎い
至て小枝の多き物ゆへ山人の切り
て柴ふるくへ併いまゞ柴ふせざ
る椎柴とよめる事もあり

俳ふ秋ゝ寺ふい冬の題詞
△まゝこは椎い椎の大なるもの

(哥)後撰　ワレ為ノ山のしゐ
のでうなる山の椎柴の
拾遺　紅葉ゆへ
とくいもくもいろいかゝし

團栗　槲の実なり(俳)そんくふ
△　祢宜の眼なる寸羹子い鬼貫

新胡桃　核果○陳倉巨宝
△　一種山なるこ鬼なる

しいふい上品へひあること云い此中ふ
雑りて甚皮薄くて破やすし

○唐ふい白胡桃とつくるもの
あるまゝ李白の詩あり

紅羅袖裏分明見白玉盤
中看郤無疑見老僧休念
誦脆前推下水晶珠　赤キ玉モ白キ玉
ニアリテハアキラカニ見ユレトモ白キ玉
ノウツハニアリテハ見ワカラズトウヤラ
老ソウガスイレヤウノヒユスタツニグンヤウナ

新榧子　大木多ー木ふ北と壮
△　とあり各花あれども
壮い実と結ぶこと北い枝横ふ
なる壮い枝上へ起なり

(俳)榧のうゝ書のゝふよ油絞　紹鷗
かやの実れてあいも齢ふくられ　暢中

新松子　松ぼくりも所ふとりそつ
△　又松の実といまつき中ふあ
是を仁ともいふなり

水木子　喬木ノ葉梅ノ如ク花藤ノ如ク黄
の色ノ実モ梅ノ如ク撰リ生ス
也実ハ食ヒテモ味ハ甘ク井蛙
俳　火ヒトヒヲヒヤシ

茱萸　山茱萸○食茱萸
類　○吳茱萸○いぬ茱萸　種
俳　沢山ニ春細キ黄花開キ秋紅キ実ノ熟スレハ小鳥ハ水音
ヲ聞テ来リ集ル

飄樹　蚊子樹　又イヌノキ
葉ハ小ク其実ハ蚊ノヤウニ云
くゝ　胡椒ノ粉ノ器ニモ用ル
又吹ケハ笛ノ音アリ此木ニ火
災ヲ除ク　火ヲ附ケ葉ヲ
風ニ吹出シテ火ヲ避ク故庭砌
ノ生垣ニ多シ　元火除木
俳　ひえの垣ヲ結テ人ヲ害ツル来山

榎實　胡椒ノ大キサニシテ味
アマシ　鳥ヨクアツ

実ヲ核ノ実ハ多クシテ蕪菁
俳　鳥梨ノ如キモ赤梨
熟梨　ヲ和シテ製シテ物ヲ
梨ハ三秋ノ部ニモ出セリ
俳　腸ハ秋ノ部ニモ出セリ

無花果　花ヲ咲カセテ実ノ其実枝間ニ
俗ニ唐梨ト云フ
花ヲ咲カセテ実ノ其実枝間ニ
アリ状木饅頭ノ如シ

鴨上戸　白英○一名鬼目ト
俗ニ白英ハ花ハ
ての名ヲ付ル鬼目ハ実ヲ云フ
又ツクミノイヒ子ニモ云ヒヨリ
好ンテ此実ヲ喰ヒ
俳　かくさまの実ヲ喰ヒ

仙蓼　本名珊瑚葉トカク俗ニ
赤キ小ク珊瑚珠ノ如キ実ハ
鉢ニ入テ愛ス

○枝の節　蔓のよくしなる故に仙蓼と云　異名　△色見州本邦にて実名と
云り又仙霊とも云くし

(俳)仙蓼の実に絞りへのあらしに三惟

晩稲　△遅稲　△晩田　○いづ国にも
おそく実のる稲なり

(俳)稲のきりたを男の晩田なる支考
松風の一衣に吸殻外文龍

漆子　△漆掻　○漆　めるていづ
きも同訓なり　汁に木
ようにぞ物をめるへ子に絞りて
蠟を作り木に異種あり
子し汁と取る別あり

(俳)木の枝に五留めし漆子哉　宗因

紅葉　赤葉とも云　異名　△色見州
○妻恋草　○錦州已上藏雲出

木の葉赤く又に黄に変りて
いのあ色イヅルとはぐめそりこつると
いよ此詞と体として紅葉と黄
変ともかく此ころ色づく葉に

○櫨　○櫨　○柿　○白膠木　○漆　○蔦
○柞　○薛　○櫻　○梅　○合歓　○ちやき
などの類なり
右の品々紅葉とつれば九月の季
なり其内楓の紅葉に別して人
毎に賞する故紅葉と云に楓の
事くるう哥に楓にかぎりた諸
木の葉の赤くなるを紅葉と
いふ又紅葉とるくても。梢の
うき又に。ちぐれる濡る梢なる
ようにても紅葉の「くるなり
○楓。ひらがな。そ。まるこ。ちぐ
等に七月の草木の部に委く訳あり

(哥)古今和歌集紅葉の哥
さほ山のたそのの紅ふちめくを
よるさへ人のとるとて用ひ
「わくら山の岩ねの紅葉ちるへし
照る日れひとりるはくて
「立田川紅葉ながれてなるなり
つくしいあきの中や絶なん

夫木　△葛の紅葉

つたのさゝ蟹のの中ゝかたゝ葛も
秋ゝなれいろうつりゆく　源師賢

金葉

もゝきゝの梢やいろこおかつる
皆その系い紅葉ーにゝり

夫木　△蔦の紅葉　家隆

つゝのこれ蔦の紅葉にゝゝろ
郁ふおくきうの山の紅

新古今　△櫨紅葉

うつゝるかゝ木ゝたるとゝ紅葉
ちゝぬ斗ふ姫風そゝふく

夫木　△柞の紅葉　顕昭

柞ゝけふいつふ附ゝのもゝん
宮下柞ゝまゝうゝゝみちゝり

仝　△まゝゝ紅葉　知家

人ゝまゝ紅葉ーゝゝゝみゝゝのゝ
細川ゝまゝゝいゝゝーゝれゝん

詞　本のゝもゝち。ゝれゝゝき。
ゝのちゝ。柞のゝゝちゝ。ゝすゝゝ。

ゝのゝ。柞の紅葉。かゝ紅。
の下深。柏のゝゝち。ゝゝゝのゝち

△紅葉ふむ△下紅葉△水の紅葉
△ゝゝゝゝ△ゝゝゝ紅葉

△紅葉狩　山路ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

△川の紅葉　秋ゝゝゝ冬ゝゝゝ安元抄ゝ出
ハ非ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

△紅葉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

「魏の花ふせりき和名ふうめ 梅里
「義王のく弥ふとしの和名あらい 嚢中
「母親い抜の和名 合点せを 貫玉
「擬紅葉親ハ場る蓋もあり 野明
「貫め乱ハ抜よかつる和名時 叙タ
「蝋燭ふおうても赤し 擬和名 李坡
狂 くくてい孫ハさこーくえる尾ーム
けおとうれくる余ものの和名 木端

詩 紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非因火
木抄絢殘霞 如花不待春

詩 仝七字對句 詩礎

紅霞迴遍吳江内 殘照晚
錦綺粧成蜀道中 斜霞秋

詩 紅葉詞 杜牧

遠上寒山石徑斜 白雲生処有人家
停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花

天曉 餽紅葉文

假山之楓 楓光色欲然
折数技以献尤右但
恐散飛愛護為妙

天曉 昏ヲ記ス 并ニ註解

光色欲然 楓樹掩映燦爛
○楓葉潤色紅煒々 ○霜

楓　粧　色　爽　紅

ニシタガヒヨツテヨホヒ

左右ニ為折一枝献忙鑒○

荒庭幾枝聊效芹意○曲

園隅処之楓為折一枝當

ハノウチノモミチナレドヒトエダオツテオメニ

野　献

カケル

但恐散飛愛護為妙

ナクユリ　デユエズイフモリタサレイ

艶妍不耐数日移竹筒厭

ウハハシイヤウナレドイツカモモチハイタサヌホドニ

風霜

ツイケニオイケナカレテ風ヤ

シモヲオヨケクネサレイ

色かへぬ松

諸木秋ふかみて

枯るゆゑ小松のみ

色かへぬと賞せり

哥　夫木

ひとうさめうるおいなくゆゑと

ひとうさめうるおいなくゆゑと

千載　藤原朝仲

色かへぬ松ぞ風のまがいて

ちりはてしその葉ぞ人々

俳　色かへぬ松と嘆くそのあとに

秋ふかみても負柳

狂　色もなき色もなき色のまてれの色

詩　全七字對句　詩題

濃霜満徑無紅葉　終待鶴

晩日高枝有白雲　未成龍

詩　色不変松詞　無名氏

半依岩岫半是雲　岩ニヨリカヘリ半ブンハクモノカルホドタカクシエル

獨立亭々冒歳寒　一ホンタチニタケ高クハエテ井ル

清節累　コノ松ノヒトツノケツハクナニサホガカヘツテヒヤー

秦時曾作大夫官　ノトキニ大夫ノクハンヲサヅケラレタガニンゲンノ身ノウヘモコノヤウナ

破芭蕉　秋風ふやぶるゝ世のこゝろうきこゝろふ

たゝえて多く哥ふこゝろ

俳　たゝえろゝ絵ゝはや破芭蕉鬼貫

狂　枯風ふあゝそふ蕉ゝ多くゝと

やゝ有ゝ「ま」の芭蕉ゝ人　貞徳

千土生　〈千土田。稽。稲孫。稲の刈田より再ひ生ゝ

いつらゞく

とゝ古名あゝ

ゝ　堀川百首

ゝ　ひゝ世ゝ山田のひつちひこゝて

稔ふゝゝ世ゝ山田ゝ

うら枯　草木の色つきかゝゝとゝ

ゝ　夫木　ゝゝさゝゆゝ小路の篠ゝう枯て

月吹ゝゝ人　洗ちふの

俳　うゝ枯ゝ第ふゝゝゝ加翠

うゝ枯やつまゝゝ松の濱ゝて桃溪

緑豆引　〈豆引〈小豆引。実のゝゝて此頃ひくゝ

蕎麥刈　俳　ほゝもそゝへて　芳宏　ゝ月の声　北鯤

草牡丹　紫衣菊。貴布祢菊。賀菊。綿絡菊。

京ゝて貴布祢菊ゝ大和

ゝて州牡丹ゝ中国筋ゝて

シウメイ菊ゝ云北国ふて加賀

菊ゝ

佛甲草　俗ふ岩蓮花ゝふ

花ひゝさて実ゝ

小蓮花　岩蓮花ゝて葉細

長ゝ

蒟蒻花　むゝさゝ色ふさく

葉の長さ二尺ゞ

かゝゝて天南星ふ似ゝう

ゝの月根を掘ゝう

櫧實　櫧ハ俗字ゝいちゐの

実ふ大ふ似ゝう　櫟ハ食

ゝ櫧ハ食ゝゝゝゝ

ハ毛ゝ

△梅嫌　子を結んと欲(俳)梅もとゝ

△種植　○櫻麥○油菜○萵苣○芥菜○紅花○蚕豆○水仙○春菜○大蒜○小麥○大麥

右の品々此月種をまくべし

△移栽　○牡丹○芍薬○竹○其外諸の果木此月うゑ

植てよう〳〵月令廣義に出よう尚又種まき花に果木うへくの仕やう

諸茶此月取八月下様等まで委しく日本歳時記九月の処に出す

草木用意

菓木うゑ実をむしる方

上十五日の内ほうゆれい実多し又菓初て熟するとき両手にてゆるべし年〳〵実多し

実のゝざる木に実の手法のゝいて穴をあけ実のる木をうゆへきなり

菓鳥の人いざる法　熟とる時一ツ二ツと取べからず一ツとも取い忽鳥をむ

生類

此部に九月一ヶ月諸の生類を集めあるす

△尾越鴨　山を越て山のひくきを尾をとりこうに此こゝに鳥い越ゆるゆへに名づく其外説多し

(俳)尾をかゝ鴨やとゞを苫屋国方

△熊栗棚かく　熊い冬に穴に入蟄して春を待て出て木にのぼり好んで栗を食ふ又枝を折うゝべ鋪て石巖枯木の中に設く是を熊の架と云

(句)白雪のうゑる木ゝ栖こそたゝみの敷の色こゝろへ為家

(俳)棚をかく熊を人に隠すこと其習

△霜踏鹿　(句)霜うれい尾花ふきゝそ少うれい霜の宿の法に乙由

(俳)ゆゝ庵の秋ゝ霜定家

あの鹿ふ粥食せもや鹿の彩　東舎

(狂)　鹿ふ食ふ者ふ者ふ者

方角　家普請他行　南方ハ北方ハ大凶ニ

破軍向方

夜九ツ 子ノ方	夜八ツ 巳ノ方	夜七ツ 寅ノ方
朝六ツ 卯ノ方	朝五ツ 辰ノ方	昼四ツ 巳ノ方
昼九ツ 午ノ方	昼八ツ 未ノ方	昼七ツ 申ノ方
暮六ツ 酉ノ方	夜五ツ 戌ノ方	夜四ツ 亥ノ方

日刻　○酉日戌ノ日。酉刻戌ノ刻。日ごとの事ニ吉ニ用ゆべし。

樂事　此頃や秋冷て木々の紅葉ニも色づき野の気色小萩露草そぐの咲初るよりて浅茅もいろばきそめれも穂ヲ出て尾花ゝゝう夜いさゝめくの虫のなごり哀え露もやゝくふくるまぞさやくくきうりかゝる秋の夕のあはれひつゝがさゝ

生花式正　○菊○川芎○おもく○紅葉○鶏上戸○もゝ○栗○南天○芦○岩菊○山ひらゝ

衣服式　朝日より八日まで袷と着を九日より綿入と着こと袴ハひゝ色ニ○女衣服も是ニ同ゝ模様ハ心ニ隨ふべゝ

紅葉衣　表そはう裏黄ニ（一説表黄裏とゝ）

櫨紅葉衣　わかて萌芽うゝ黄ニ

養生　此月陰旺ゝ陽衰ふ當ニ精を固くし神を斂むべゝ補養の茶を用ひて気を養ふべゝ座卧西南ニ向ふてよ又野外ニあそびて血脉を養ふべゝ風寒ニ感じやすゝ時を考へてつゝむへゝ日月の未ニ至り味の甘き物をそぶきて辛く又酸なる物を増して腎気を補ふべゝ秋ゝくハ延寿養生論ニ出を

蜜柑と夏ミを貯ふる法

うちふ竹とまこと然にてつふとよくして下家穴ゲ〜ふ入おくべし

佛所ゴ年中貯ふる法　あつ〜ときはと屋さのまわりと漆をそとうくゆり蠟ふ入ふさとよく〜して扨〜

飲食

九月一ヶ月食物の類とあら免出を

△新蕎麦　(能)新蕎麦や客も絵紅葉めり可由

粉蕎麦と麻芋汁ふ粉ゆり々り玄坡

△柚味噌　(能)柚釜。柚干

清〜米や柚ふをふ付て俗の上　オ広告陽明家へ

△とち餅　栃の実と持き浸〜粉〜て團子ふ

△蒲萄酒　世俗の和制をる物を好酒ふぶど〜と浸〜置てもれとのめり漢土の制と異なるべし

九月飲食 并 料理献立

禁物　生姜　八九月多く食へば春ふ至りて眼と病む壽を損じ筋力と減らす　妊婦これを食へば生る子六指をしむ

○冬瓜今月食へば反胃と病む霜ふりて後食ふべし　孫真人の説へ

好物　雉肉　九月より十一月まで食ふべし　稍補あり他月ハ宜しからず

料理

汁

ちらしご　くじ〜はも　やきえび　薬付ぐち

めうぜ　ふかぶ〜ゆの皮　千房ざき

あまご白やき　ちらし　まこんぶ

あめめ　まのめ

膾

さより　くじゃくらげ　ぐ〜が

大こん　こんぶ

せんご　ふづくり　白身ふこの　ふくらげ　ろふ

うど・ひじき　岩〜ふ

けんがぞ

和會物

干いか・ごぼう・松茸・あく・ゆ

人参・貝・細切・松茸・むきぐり・あく

吸物

大根・そば・手麩・きくな・ゆ

精進

汁

大こん・麩・甲・あげ・くず

膾

大こん・たこ・たかな・あげ・ふ・たかが・小豆・あかかぶ・ごぼう・木ごぼう・大こん・きんかん・ゆず・ぎんなん・ゆ

清汁

松茸・ぎんなん・ゆ

差味

いせえび・小口切・こんぶ・ごぼう・きくらげ・ぎんなん

煮物

大こん・松茸・あげ・ぎんなん

たこ・かざみ・ぎんなん・ゆ

清汁

ひきさけ・ぎんなん・ゆ

ちりめんぼら・黒さけ・かしら・梅・こんぶ

たいこ・ぎんなん

きんこ・松茸・ぎんなん・ゆ

煮物

大こん・ぎんなん・ゆ

ぼら・いしづく・松茸・さけ・ぎんなん・ゆ

差味

きくらげ・ぎんなん・ゆ

清汁

ぼら・いしづく・松茸・さけ・ぎんなん・ゆ

きくらげ・ぎんなん・ゆ

きくらげ・ぎんなん・ゆ

煮物

大こん・ぎんなん・ゆ

あらびき・たい・ぎんなん・ゆ

清汁

松茸

差味

松茸かまぼこ
ろくろけんまま
かうらけ

海ノ原ダル・出し
くるみ・きくらけ
くるみ・こまきひどこそ

松ごのり・蛤
手・桂うけ

秋こんぶ
ゆくれ
まかうけ

石州豆腐ちん
ふんこしん
あさくさ
こぜんとこそ

平かんぞう・梨
やうだくげ
くるみ・いろは

煮物

えめ
ひるべすす
やこいも

竹鶏どぬ
干
ぐうけ

千房さいがき
あげこん
かやく

たうろいも
まろうけ
ゆひるべすす

ひるこさの
物がし
ぜんきん

松くけ
うすこんぞ
くるべ

松茸 表物て
ごぼう
くるみ

和會物

おへ
伊ふかれ
まきあく

ふー・ふき
きくげ
たくるあく

松茸
こげ
ごぼうこそ

はくぶ
きがいも小角切
あくきたく

ふきのまま
くろあく

はくぶ
あげこん

松こけ
せんかうこそ

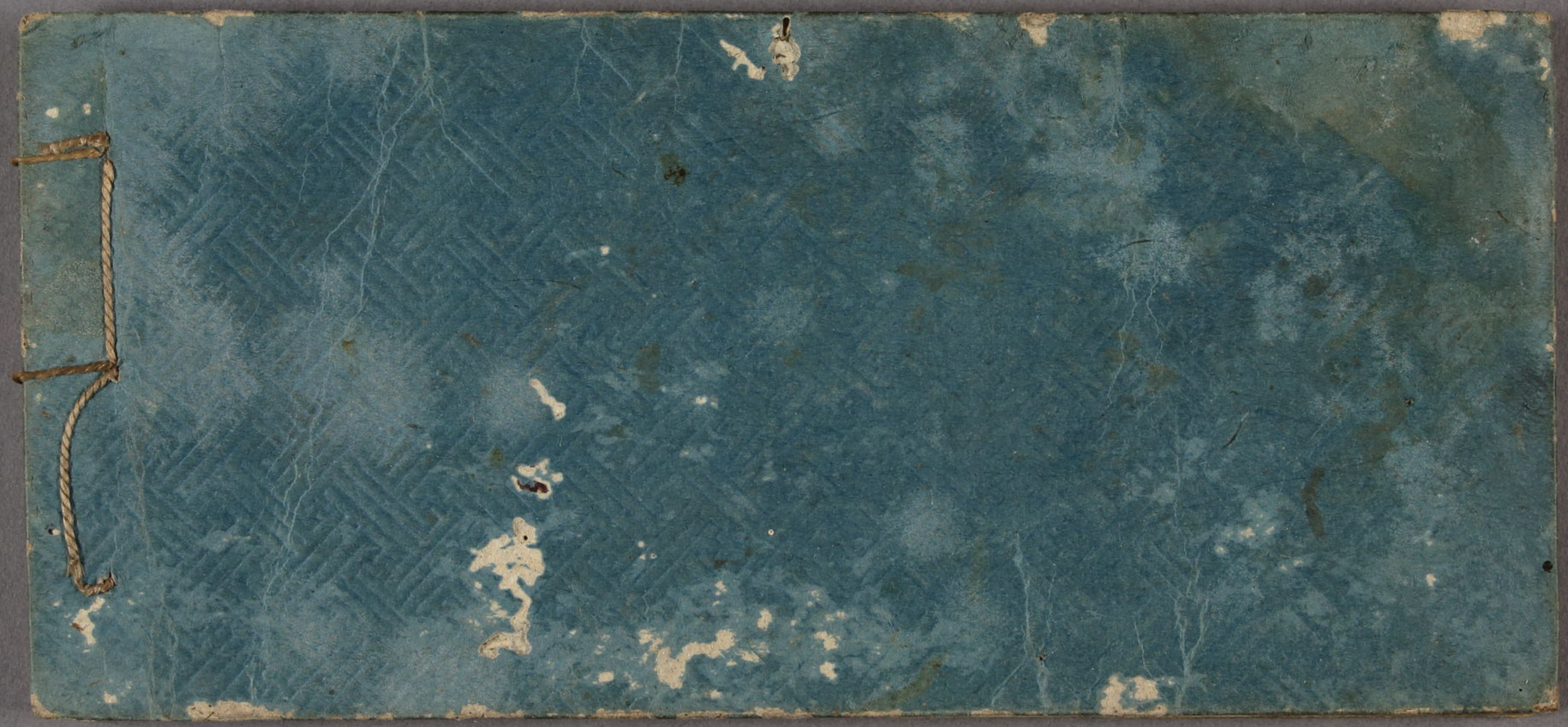
ふここそ
あくこん

松茸
こげ
ごぼうこそ

吸物

まこのり

松茸
まのうこ

椿梗のね
むめひーは
あく

くぐーぐどぬ
ゆうろ